介 護 職 員 自 己 評 価 表

2024年2月20日

事業所名	通所介護　デイサービスリハビリセンター瀬々串

	正社員	非常勤社員
社会福祉士		
介護福祉士	5人	
理学療法士	3人	
介護支援専門員	1人	
実務者研修修了者､その他	3人	
准看護師		1人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備　考
前回の課題に関する改善	3.0%	89.4%	7.6%	0.0%	

前回の改善計画

活動性を高める訓練として、理学療法士による個別機能訓練、トレーナー・生活支援員による有酸素運動・コグニサイズ・レクリエーションなどをおこなっている。落ち着いた日常につなげる練習として回想療法などの心理療法を生活支援にくわえて提供している。認知症はあるが、概ね落ち着いた暮らしにつながっているご利用者は多く、運動療法の効果が認められた。メンタルに関する課題から周辺調整が問われるご利用者は多く、小集団の支援に参加してもらい活動性を高めて、スタッフやご利用者との会話や関わりのある環境を目指す計画とした。多くのスタッフには得手不得手があり、スタッフの特性にあわせた支援を中心に提供する計画とした。外部講師による社内の教育プログラム、健康運動実践指導者養成講習会の受講を通して健康運動実践指導者を目指すなど、資格取得によりスキルアップを図る計画とした。

前回の改善計画に対する取組み結果

理学療法士による個別機能訓練は高い評価を得ている。トレーナー・生活支援員によるパワーリハビリ・有酸素運動などは午前中におこない、ほとんどのご利用者が参加するようになった。昼食前にレクリエーション、午後は認知症ケアに有効なコグニサイズなどの体操に加えて回想療法を提供し、活動性を高める時間と落ち着きにつなげる時間を意図的に分けた支援を提供した。運動療法は、興味を持ち積極的に参加されるようになったものの、回想療法などの心理療法は、積極的に取組む方だけでなく、あまり参加されない方もみられ、午前中におこなった運動疲れが出ているようでもあった。午前中の運動療法は、既に習慣性を獲得しており、日常生活の活動性向上がみられるだけに、活動と落ち着きをバランスさせるプログラム構成が課題であった。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合　計
SECTION　1	対象者の接し方や態度について	16.7%	33.3%	50.0%	0.0%	100%
SECTION　2	仕事上の態度について	16.7%	66.7%	16.7%	0.0%	100%
SECTION　3	食事について	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100%
SECTION　4	移乗や移動について	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100%
SECTION　5	排泄について	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100%
SECTION　6	入浴について	0.0%	83.3%	16.7%	0.0%	100%
SECTION　7	着替えや整容について	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100%
SECTION　8	服薬について	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100%
SECTION　9	意思疎通について	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100%
SECTION　10	行動障害について	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100%
SECTION　11	普通の生活やアクティビティについて	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100%

自己評価及び改善が必要な事項

個別機能訓練はケアカンファレンスでご利用者の身体課題を検討している。トレーナー・生活支援員は、ご利用者の身体機能を踏まえて軽負荷のフィジカルトレーニングや有酸素運動を理学療法士の指導の下で提供しているが、適切な負荷調整が難しく、運動量不足が疑われた。日々の状態を踏まえた運動提供が課題であった。認知機能と運動機能に同時に働き掛けるコグニサイズは活動量の確保と笑いによる刺激を導き出し、ご利用者の表情を穏やかにし、メンタルの安定に寄与しているようであったが、新しいプログラム制作が追いつかず、飽きの来ない支援が課題であった。懐かしい絵を用いた回想療法、回想ライブラリーを活かした回想療法、懐かしいテレビ番組を用いた回想療法、顔表情に基づくSOLOデジタルセラピー、手続き記憶を活かした巧緻作業など、さまざまな支援を提供しているものの、スタッフの特性にあわせた支援について、教育を含めて検討すべきであった。新型コロナは５類移行後であるものの、インフルエンザの感染状況をみれば、感染対策を講じながら運営せざるを得ない状況にある。

主任 梅津　豊

外部評価者

新型コロナは５類移行とはいえ、既に第10波となり隘路にはまり込んでいます。2度目、3度目の感染者は増加傾向にあり、虚弱な高齢者を扱うデイサービスでは感染対策が必須になりますが、職員は潜在化した負担が蓄積しているようです。職員の負担軽減に、しっかりと話し合うことをおすすめします。職員一人ひとりに違いがあるように、ケアについても得手不得手があり、技術の習得度合も異なります。話すことで理解できることや解消することも多く、社内外の相談できる仕組みを活用すべきかもしれません。こちらの事業所は教育に注力されていました。無資格者に向けた介護福祉士実務者研修、健康運動実践指導者を目指す職員を対象とした健康運動実践指導者養成講習会など資格取得制度が準備され、外部講師による社内の認知症ケア研修など教育プログラムが整っていました。一方、身体機能に有効な運動負荷が課題となっていました。認知症高齢者は状態変化を伝え難く、悪化が疑われると、中止、或は、軽い有酸素運動として扱う方が良いかと思います。担当の理学療法士に確認しながら進めて下さい。コグニサイズは認知症ケアとして有用ですが、新しいプログラムを作り続けることは大変なことも多いと思います。楽しめる支援に軸足を置いて、無理せず継続することに努めてください。総合的な評価は、利用者に適した専門的な支援が複数提供され、多職種が協働してサービス提供していることが推察できました。今後も地域に根ざした事業所として頑張ってください。

〒891-0141 鹿児島市谷山中央5丁目37-11-302
特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所
社会福祉学博士　田　中　安　平